

unjour

いつもどこかで素敵な出会いを

2016
春



ひと

大事な家族の送り方

等雲寺住職 真宗大谷派金沢教区
金沢真宗学院指導

坂本 学 ×

1級葬祭ディレクター

吉田 友恵 ×

1級葬祭ディレクター

沢口 隆司

セレモニー会館兼六

- セレモニー会館 兼六西泉**
〒921-8043 金沢市西泉4丁目85番地
☎076-241-4949
- セレモニー会館 兼六駅西**
〒920-0024 金沢市西念4丁目26番15号
☎076-234-7744
- セレモニー会館 兼六城北**
〒921-0842 金沢市元町1丁目8番20号
☎076-252-9999
- セレモニー会館 兼六笠舞**
〒920-0965 金沢市笠舞3丁目4番3号
☎076-224-8700
- セレモニー会館 兼六扇が丘**
〒921-8812 野々市市扇が丘3番19号
☎076-248-0005

人生の節目にまつわるお悩み解決

Q & A

Q 仮通夜、通夜、葬儀の服装について教えてください

A 仮通夜では、喪服の着用は必要ありません。派手ではない普段着でよろしいです。通夜、葬儀では、男性の場合、ダブルまたはシングルの黒スーツに白シャツ、光沢のない黒無地のネクタイを着用し、タイピンやカフスはつけません。靴下は黒か濃紺、靴は黒の革靴が望ましいです。

喪主は黒、または白の羽織紋付袴が正式ですが、現在ではダブルかシングルの黒スーツに喪主リボンをつける方が殆どです。

女性の洋装の場合は、光沢のない黒無地のワンピースやスーツ、またはアンサンブルで、黒のストッキングに飾りのない黒革またはスエードなどのパンプスを履きます。基本的にアクセサリーは控え、つけるとすれば、真珠のものを一つだけにします。バッグは布製の黒無地のものがよいです。冬の寒い時でコートを着用される時は毛皮・ファーのついたものは避けて下さい。

和装の場合、金沢では通夜は色無地に黒帯、葬儀は黒喪服という風習があります。色無地をお持ちでない場合には通夜・葬儀とも黒喪服で通される方も多いです。6月・9月は単衣、7月・8月は結とされていきます。半襟・下着・褌袴・足袋などはすべて白で、草履は黒の布製を履きます。



兼六互助センターからのお願い

■ご住所・ご連絡先が変わられた会員様へ
住所等変更をお知らせください
お電話またはEメールにて受け付けております。

☎(076)242-0612
Eメール: murairgp@po.incl.ne.jp

編集後記

今回は読者の皆様のご意見で一番多かった「家族葬」について企画してみました。真宗大谷派等雲寺坂本ご住職のお話は、とても興味深く、その場のスタッフ全員が引き込まれていました。この座談会が、今後の皆様の葬儀の参考になればいいと思います。

読者プレゼント

同封のハガキにご意見・ご感想・質問など
お気軽にお寄せください。



浅田屋グループ **お食事券 2万円分**
抽選で **5名様にプレゼント**

応募締切 平成28年6月1日(水)
※当選者には、こちらからお届けに伺います。

私達から見た家族葬の メリットとデメリット

※ 価値観の多様化により増えて来た葬儀の形ですが、後悔しない葬儀にするために考えておくべき事とは



吉田友恵（よしだともえ）弊社村井スタッフ



沢口隆司（さわぐちりゅうじ）弊社村井スタッフ



坂本学（さかもと まなぶ）金沢市長町にある等雲寺のご住職。輪島市生まれ

少子高齢化や核家族化、地縁の希薄化といった社会の変化を背景に、葬儀の形が変わりつつあります。特に増えているのが「家族葬」ですが、あまりいな定義のままで進められることもしばしば。納得のいく葬儀にしたいため、家族葬について対談を行いました。

— 家族葬はいつから広まったのか？

坂本 家族葬という言葉は、いつごろから使われるようになったのでしょうか？

村井 2010年頃からです。従来は葬儀というと、参列者の多い式が一般的でした。ところが近年では、喪主の高齢化や少子化などを背景に、小規模のお葬式が増加しています。葬儀社が、こうした参列者の少ない葬儀を「家族葬」と称し、商品化したのが家族葬の始まりだと言われています。

坂本 ところで、家族葬の定義とは、一体何ですか？

村井 葬儀社によって違いますが、喪主（身内）が親族や町内会をはじめご近所の方に、ご案内するかどうかという点が判断材料となります。さらに村井では「新聞のお悔やみ欄

は、見えないところでの出費や手間があることを、知っておくことが必要ですね。
村井 家族葬という言葉だけが一人歩きしており、実際には内容をよくご存じない方も多いように見受けられます。たった一度のご葬儀ですから、納得のいくものにしていただきたいとお思います。村井では、それぞれのメリットやデメリットをお話して、選んでいただくよう心がけております。

— 改めて、葬儀とは？ 家族の意味とは？

坂本 家族葬にするか一般葬にするかについては、葬儀や家族の意味を、改めて問い直す必要がありますね。

村井 はい、昨今の状況をみると、少子化や喪主の高齢化といった事情から家族葬が選ばれている傾向があります。でも、もっと根本的な部分で、家族や葬儀について考える機会を持っていただくことが、私にも必要だと感じています。

坂本 時折、「葬儀は誰のために行うものですか？」と質問を受けることがあります。私は「故人」と「弔問客」の両

に故人の名前を掲載するか否か」も判断基準としています。坂本 家族葬が増えているのは、全国的な傾向でしょうか？それとも、特定の地域のみ傾向でしょうか？

村井 「家族を中心とした近親者のみの葬儀」という意味では、全国的に執り行われていると思います。ただし以前から、遺族・親族を中心に密やかに行う葬儀は存在しており、業界では「密葬」と呼んで、一般葬と区別していました。

坂本 家族葬は、従来からあった密葬に近い形式ということですね。ちなみに、いわゆる家族葬を希望されるご家族は増えていきますか？

村井 年々増えてはいますね。ここ数年の傾向を見ると、今後もさらに増えることが予想されます。

— 葬儀に参列する人数 やかかる費用など 一般葬との違いは？

坂本 一般葬と家族葬の大きな違いは何でしょうか？

村井 参列者の人数と費用です。参列者に関しては、一般葬では約150名、家族葬では約15名が平均的な人数です。

坂本 葬儀の際、祭壇には故人の遺影を飾りますし、多くのお花も添えますから、故人のためというのは、よく分かります。弔問客のためという点については、もう少し教えていただけますか？

坂本 葬儀は、弔問に来られているお一人おひとりが、ご自身を見直す機会だと思っています。実は葬儀であげているお経は、生きています。村井 たしかに、お経の内容を考えるとそうですね。

坂本 お経には、亡くなった故人を通して、自分の存在や現在の立ち位置を確認してほしい、非常な世の中、無常の現実を生き抜いてくださいと願われています。

村井 葬儀という非日常の場だからこそ、故人との関係性を再確認できるし、生きる意味とも向き合うことができるんですね。

坂本 その通りです。「人間」とは本来、「人の間（あいだ）を生きる」という意味。誰もが自分以外の誰かとの関係性をつくり、つながりながら生きています。そして「家族」は人間の中でも、もっとも関係性が強い相手なのです。

村井 葬儀は関係性の深い、大切な家族を送り出す儀式。そして故人とご縁のあった方もまた、葬儀という機会を通して、ご自身の生き方と向き合えるということですね。

坂本 はい。そういう意味では、家族葬や一般葬といった区別は、あまり意味がないものかもしれませんね。ご家族を中心として、故人が生前「人間」として関係性を持った人々で見送ることが大切だと感じます。それが私たちの生きる指針になっていくからです。

村井 今後家族葬は増える傾向にあると思います。もちろんニーズにお応えできると

坂本 10倍近く違いますね。

村井 家族葬の場合は、勤務先や所属団体の方も参列しませんし、隣近所の方も参列しません。このあたりの差が大きいですね。

坂本 葬儀にかかる費用を比較すると、どれくらい違うのでしょうか？

村井 一般葬では約200万円、家族葬で100万円が目安となります。

坂本 こちらも倍半分の違いがありますから、大きいですね。ちなみに、家族葬を選ぶメリットは何でしょうか？

村井 大きなメリットが3つあります。まずはやはり、葬儀自体の費用が抑えられること。次に、弔問客が少ないので、故人とお別れに集中できること。最後に、弔問客をおもてなしする手間が必要ないことです。

坂本 家族葬にすることで、デメリットもありますか？

村井 はい、デメリットもあります。内輪で通夜から火葬までを済ませてしまうので、後日知った方から「お参りしたかったのに」と小言を頂くケースもあるようです。

坂本 一度きりの葬儀ですから、故人にゆかりのあった方



の中には、複雑な気持ちになる方もいるでしょうね。

村井 そうなんです。また、参列者が少ないということは、ただける香典料も少なくなるということ。家族葬は費用が抑えられるイメージですが、香典でまかなえる金額が少ない分、持ち出し費用が高額になる場合もあります。

坂本 他にも知っておきたいデメリットはありますか？

村井 家族葬の場合、後日、ご自宅にお参りにくる方も多いようです。故人を偲ぶ気持ちがありたいですが、個別対応が大変という意味では、デメリットと言えますね。

坂本 家族葬は「手軽」というイメージです。でも実際に

参列者の範囲	家族葬	一般葬
家族 近親者（三親等くらいまで） 親しい友人・知人 勤務先・学校・所属団体 隣近所	○ ○ × ○	○ ○ ○ ○
参列者予定人数	約10名～20名 △(必要あれば)	約150名
受付の設置有無	○	○
会葬返礼品有無	○	○
火葬場の予約手配の有無	○	○
僧侶の手配の有無	○	○
会場の空き手配の有無	○	○
計報の掲載の有無	○	○
枕飾りの有無	○	○
納棺の有無	○	○
通夜の有無	○	○
通夜振舞	○	○
看板の有無	○	○
告別式の有無	○	○
お斎（中陰）	○	○
火葬・繰り上げ初七日の有無	○	○
四十九日法要・納骨の有無	○	○

いう意味では、家族葬は大切ですが、葬儀や家族の意味を、改めて考えていただくことが大事だと再認識しました。

坂本 私たち人は、家族をはじめ、友人や知人など、いろいろなご縁の中で、「今」を生きています。そう捉えらると、ご友人や知人に参列していただく従来の葬儀こそが、やはり本来の形といえますね。

村井 村井は約100年もの間、地域の葬儀を見てきました。やはり多くの方々に送られる葬儀の方が、さまざまなご縁やつながりを大切にすることにつながると思っております。本日はお時間をいただきまして、誠にありがとうございました。

村井 葬儀は関係性の深い、大切な家族を送り出す儀式。そして故人とご縁のあった方もまた、葬儀という機会を通して、ご自身の生き方と向き合えるということですね。